

新富町文化財調査報告書 第 21 集

平成 8 年度 町内遺跡発掘調査概要報告書

1 9 9 7

新富町教育委員会

序

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に面し、宮崎平野部の北部に位置します。

町内には国指定史跡新田原古墳群、県指定史跡富田古墳群をはじめ、住環境の良好さを示す史跡や埋蔵文化財が数多く所在しています。

本年度も、諸開発行為にともなう埋蔵文化財調査を実施しました。

文化財に関する情報はニュース・新聞等のメディアによって広く提供され、国民の关心や期待は日々高まりつつあるものと思われます。

当町でも地域の歴史を後世に伝えるため、日々努力するところであります。

発掘調査にあたりましては、多くの関係者に文化財行政の主旨をご理解頂き、感謝の念に絶えません。

これら調査で得られた成果は広く生涯学習の場で活用します。

平成9年3月

新富町教育委員会

教育長 清 郁 雄

例　　言

1. 本書は平成8年度に宮崎県児湯郡新富町で実施した埋蔵文化財の予備調査および本調査の概要報告書である。
2. 調査は主として文化庁の国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」をもとに実施し、本書作成経費もそれによる。
3. 調査体制は次のとおりである。

○総　　括　清　郁雄（新富町教育長）
　　水間　亮（新富町社会教育課長）
　　高正　静夫（新富町社会教育課長補佐兼社会教育係長）
○庶　　務　山崎　和子（新富町社会教育課副主幹）
○調整・調査　有馬　義人（新富町社会教育課主事）
○指　　導　柳沢　一男（宮崎大学教育学部教授・考古学専攻）
　　菅付　和樹（宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財第1係）
○参加学生　藤本貴仁、黒木誠也、松永幸寿（以上　宮崎大学）
○作業員　野尻富子、杉尾美千子、日野仁美、河口真理、長友俊博、宮崎雄大
4. 発掘調査期間はそれぞれ本文中の表1に明記している。
5. 本書の執筆・編集は有馬がおこなった。
6. 本書で使用される図面の実測・トレースは有馬、藤本、長友が行なった。
7. 本書で使用する方位は図3・7・11・12・13が磁北である。
8. 調査関連資料および出土遺物はすべて新富町社会教育課が一括保管している。

本文目次

| | |
|----------------|----------|
| 第1章　はじめに | 1～7ページ |
| 第2章　富田1号墳（第2次） | 8～10ページ |
| 第3章　富田城切通地区遺跡 | 11～13ページ |
| 第4章　上日置城跡 | 14～16ページ |
| 第5章　祇園原古墳群 | 17～26ページ |

第1章 はじめに

第1節 新富町の位置と現況

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に面し、県庁所在地である宮崎市から約20km北に位置している。北西部から南東部にかけては一ヶ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90mの台地面にかけて町域を有する。

隣接する市町村は西に西都市、北に高鍋町、南に佐土原町で、町域は南北約7km、東西約9km、総面積が約61km²である。

主幹産業は酪農や園芸を中心とした農業であり、台地の中央部には自衛隊新田原基地があるため、「やさいと基地の町」というイメージが強い。

町の人口は平成8年4月現在で18,053人であるが、近年の道路交通網の整備にともない、宮崎市への通勤時間が短くなったことや、宮崎市周辺の不動産価格の高騰により、本町での宅地開発が活発となつたため、人口も緩やかな増加傾向にある。

第2節 地理的環境

新富町が位置する宮崎平野は九州でも筑紫平野に次ぐ平野面積があり、なかでも台地が占める割合が高い。これら台地の形成は第4紀中期更新世初頭（70万年前）からの九州山地の隆起に始まり、氷河期と間氷期の連続による気候の変化が、海平面の上昇・下降による土砂の堆積・侵食をよび、著しい段丘化が進行していった。

現在の段丘面は大きく11面に区分でき、古い順に椎原面、久木野面、茶白原面、三財原面、新田原面、西都原面、豊原面、大淀面、国富面、三日月面、完新世段丘面と呼ばれる¹⁾。これらのうち新富町の台地面の大部分は三財原・新田原面に属し、標高70～90mの広大な平地が広がる。

沖積平野部に目を向けると、上記の段丘面が脆弱な部分から開析されて形成された急峻な谷の底部（日置川、鬼付女川流域）と、一ヶ瀬川流域沿いの低位段丘面、海岸部の4～5の砂丘列に区分でき、それぞれ有効な土地利用を可能としている。

第3節 歴史的環境

① 旧石器時代

遺跡の分布は新田原台地上が多く、後の縄文時代草創期の遺物を含む。

発掘調査された遺跡は4箇所と少なく、いずれもアカホヤ層下から集石遺構にともなって遺物が出土した例が多い。

町内最古の例としては溜水遺跡で出土したナイフ形石器があり²⁾、その他の遺跡では細石器が多い。町内では第2オレンジ層下の調査例がないため古い資料が少なく、近隣地域で前期～中期の石器が検出される例が増えつつある状況を考えると今後の調査を徹底したい。

ところで、町内出土の細石器の多くは1980年代に大野寅夫氏によって本町大字新田字畦原を中心として表採・分類された「畦原型細石器」と呼ばれるもので、南九州を代表する標識資料となっている³⁾。

② 繩文時代

これまで5つの遺跡で調査例があるが、検出された遺構の多くは集石遺構である。時期も旧石器から縄文草創期までが多く、前期以降の遺跡は少ない。

集石遺構は瀬戸口遺跡で確認された掘り込みをともなうものが大半で、押形文土器、隆起線文土器、貝殻条痕文土器などが出土している⁴⁾。現在のところ集落や生活形態を復元できるまでの資料が少ない。

③ 弥生時代

前期の遺跡例に板付II式併行期の塗が表採された今別府遺跡がある⁵⁾。この遺跡と同様に前期から中期前葉までの集落は、日向灘に面した砂丘列上や台地端部、そして河岸低位段丘面に営まれた例が多い。日向地方の稲作開始期にあたるこの時期の水田經營は、河川流域にありながらも灌漑技術の未成熟さから谷地からの湧水を利用した小規模なものが予想される。

中期後葉から後期になると集落の立地が内陸化する傾向にある。新田原遺跡では堅穴住居12軒が谷地形を挟んだ微高地にあり、湯之宮遺跡などはさらに内陸に位置する。この時期の土器には瀬戸内地域との活発な交流を示す影響が認められ、その反面、在地的な花弁状住居が出現する時期もある⁶⁾。

後期から終末期の集落は調査例が少ない。しかしながら風早遺跡⁷⁾の灌漑施設やその周辺の遺物の流入などから谷部を中心に水田經營を進めていた状況が想定でき、方形周溝墓・円形周溝墓を含む195基の土壙墓が発見された川床遺跡⁸⁾では西日本全域に及ぶ広域的な交流が予想される。

④ 古墳時代

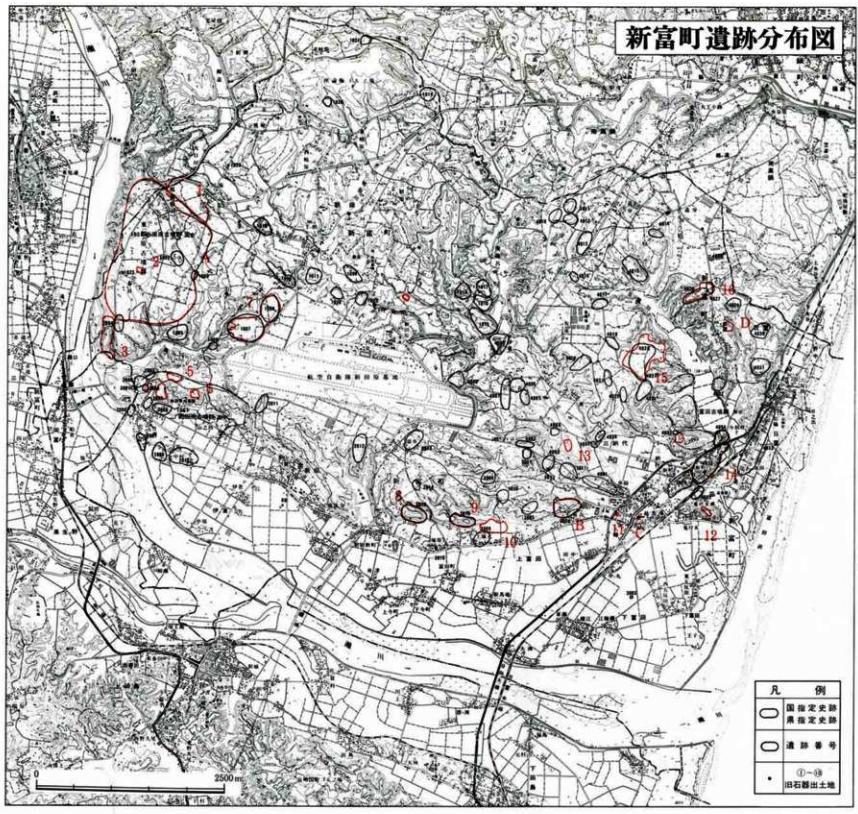
前期の遺跡として海岸部の丘陵上に立地する下屋敷古墳がある。墳丘は前方後円形を呈し、内部主体が組合せ式木棺の日向地方でも最古の古墳と推定されている⁹⁾。集団の墓域である川床遺跡とは、単独で立地し埋葬者が単体であるなど、被葬者の集団内での階層的差異が見られる。

やや時期がくだって山之坊古墳群、塚原古墳群、祇園原古墳群では墳丘50m以下の中小規模の前方後円墳が継続して築造されるようになる¹⁰⁾。ところで、前期の一つ瀬川流域には西都原台地を中心として多くの首長墓が存在する。これらはそれぞれのグループを圧倒する規模ではなく、特に西都原台地上では複数の系列が台地上を共有して造墓活動をおこなっている¹¹⁾。町内の古墳群も同流域での一勢力と理解できる。集落には山之坊古墳群に近接して銀代ヶ迫遺跡があり、住居7~8軒で集落を構成しているが¹²⁾、前方後円墳を築造しうる首長層の集落とは考えがたい。

中期になると、西都原台地上に女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳が登場し、同時に一つ瀬川流域を含む日向地方全域において古墳群規模の拡大や縮小ないし断絶が認められる。このことは日向地方の首長層の再編を意味し、両古墳の被葬者が日向地方全域の盟主となったことを想定させる¹³⁾。

町の北西部にある祇園原古墳群は、この変動以後に前方後円墳が継続して築造された日向地方での後期最大規模の古墳群である¹⁴⁾。同様に6世紀以後継続して築造される大淀川流域の下北方古墳群と拮抗しつつ、やや優位な関係を保ち終末期に至ったようだ。古墳群の詳細については第5章で触れる。

一方、町の東部台地上には上薦遺跡で集落が形成される。現在町内で確認される5世紀後半以降の集落はここのみで、300軒以上の住居が確認されている¹⁵⁾。また集落の縁辺や丘陵上には円墳や横穴墓が群集し、集落と墓域の関係を推定できる貴重な事例もある。



第1図 平成8年度発掘調査位置図



○ 平成8年度調査対象遺跡

- A. 紙團原古墳群
- B. 富田城下ノ城
- C. 富田1号墳
- D. 上日置城跡

○ 主要な遺跡

- | | |
|-----------|------------|
| 1. 川床遺跡 | 9. 富田城上ノ城 |
| 2. 潟戸口城跡 | 10. 北田地区遺跡 |
| 3. 有峰城跡 | 11. 下屋敷古墳 |
| 4. 銀代ヶ追遺跡 | 12. 観音山遺跡 |
| 5. 八幡上古跡 | 13. 風早遺跡 |
| 6. 七又木古跡 | 14. 今削古遺跡 |
| 7. 新田原遺跡 | 15. 上齋遺跡 |
| 8. 竹ヶ山城 | 16. 藤掛遺跡 |

⑤ 古代～中世

上薗遺跡は14世紀頃まで営まれた集落で、町南部の沖積段丘面には古墳時代後期から中世の住居が確認された北田遺跡がある¹⁶⁾。しかしながら町内を含む一ヶ瀬川流域の古代から中世の集落については資料が少ない。

古代の文献上では『倭名類聚抄』(935年)のなかに児湯郡8郷（三納・穂北・大垣・三宅・觀嶺・韓家・平群・都野）があるが、現在の新富町に該当する郷はわからない。

その後『日向国図田帳』(1197年)のなかに、「湯宮・倍木・新田・下富田・宮頭」の地名が登場する。これらのは莊園として領有されていたが、古代以前から開発され農地を拡大した村々の姿が想像できるため興味深い。

南北朝時代になると関東からの武士や在地豪族の横領などの混亂が続いたようだが、伊東義祐の全盛期には富田城周辺が外城の一つとして支配地の重要な位置にあった。

その後島津氏が伊東氏を追いやる支配するが、羽柴秀吉の九州進出によって現在の日置・三納代・上下富田地区が秋月高鍋藩に、新田地区が島津佐土原藩の領地となった。

この時期の集落は山城を中心に周囲に集住したものが多く、山城の周辺には「麓」や「城元」などの字名が数多く残っている。また町内で確認される中近世城跡は8箇所である。

⑥ 近世以降

近世の新富町はそれぞれ別個の藩の支配を受けたため、慣習などの相違が現在でも見受けられる。

江戸終末から明治初頭における現在の新富町域の人口は約6,000人弱であった¹⁷⁾。明治以降に現在の人口になったのは、全国的な人口増加以外に台地上の開拓による入植が理由として上げられる。

また、行政区域は明治22年に新田村・伊倉村が合併して新田村に、日置村・三納代村・上富田村・下富田村が合併して富田村になる。そして戦後の昭和34年に新田村と富田村が合併して新富町になった。

第4節 平成8年度の開発行為の動向

町内の開発行為の動向は民間・行政ともに増加傾向にある。

地方公共団体の事業では、道路網の整備が上げられる。東九州縦貫道建設予定区間が決定し、児湯郡内に到達するに従い、周辺アクセス道の整備計画が多数予定されている。路線改良・拡幅が計画されるもので、「県道木城－西都線」、「同南高鍋線」などがある。

農業関連整備では平成7年度の一ヶ瀬土地改良事務所の事業終了によって大規模整備が一区切りされた感があるが、用排水路や農道整備のほか個人による畠地の土壤改良（天地返し）などで比較的規模の大きいものがある。

土地整理事業では富田地区的市街地区画整理が最終段階に入り、県指定史跡「富田村古墳1号墳」の擁壁設置についての調査のほか、北区の整理事業により独立丘陵部の平地化が計画されている。

民間の開発行為では、宮崎市や佐土原町の不動産価格の高騰により、町内での宅地造成が多発している傾向にある。これら宅地造成は海岸部では養鰻場跡地などの再開発のほか、急傾斜地の土砂採取を当初の目的としたものが多い。

土砂採取では工事用埋土として本町から高鍋町におよぶ丘陵の砂利が利用されることが多く、県内シェアの7割を占めるようである。またこれら土砂採取の跡地は産業廃棄物処理地への利用など多岐にわたり、工事計画が未定な場合が多いため事前協議が困難である。

以上のように、町内では行政と民間のいずれにおいても小規模開発が分散的に実施される傾向がある。教育委員会では1982年に「遺跡詳細分布調査」を実施して既に20年近く経過し、当時の分布調査の精度が問題となっている。今後は周知外の遺跡の分布調査を徹底し遺跡の周知化を行いたい。

第5節 平成8年度の調査内容

本年度の調査では中近世山城の測量調査など遺跡の範囲確認を努める結果となった。山城は現在町内で8箇所確認されているが、遺跡の範囲が広く、多くが雑木林であるため、史跡指定や分布調査の行政事務が遅れている。特に、先述の宅地造成目的土砂採取等がある際には、工事期間と調査期間の調整が困難であるため、開発計画前の情報収集が求められる。

一方、平成8年度策定予定の「新田原古墳群整備基本計画書」のなかでは、遺跡環境保護のための事前調整を指摘し、道路路線改良・農業基盤整備など今後山積する問題は多い。本年度実施した墳丘測量調査は整備に向けた現状確認である。

表1 平成8年度 町内遺跡調査一覧

| 番号 | 遺跡名 | 周知有無 | 遺構年代 | 調査原因 | 原因者 | 調査内容 | 調査主体 | 調査期間 |
|----|------------|------|-------|--------|------|------|------|----------------|
| 1 | 新田原古墳群周辺遺跡 | 周知 | 弥生～中世 | 農道用水整備 | 県 | 分布調査 | 町 | H8 5月 |
| 2 | 富田1号墳 | 周知 | 弥生～古墳 | 土地区画整理 | 町 | 確認調査 | 町 | H8 5/15～6/28 |
| 3 | 上日置遺跡ほか | 未 | 縄文～中世 | 県道路線変更 | 県 | 分布調査 | 県 | H8 6/27 |
| 4 | 富田城切通地区遺跡 | 未 | 古墳・中世 | 文化会館建設 | 町 | 試掘調査 | 町 | H8 7/11～9/25 |
| 5 | 比良横穴墓群 | 周知 | 古墳 | 土砂採取 | 井関建設 | 分布調査 | 町 | H8 9月 |
| 6 | 新田原201号墳 | 周知 | 縄文・古墳 | 宅地造成 | 恵清建設 | 現状調査 | 町 | H8 9/17～/19 |
| 7 | 上日置城跡遺跡 | 未 | 中世 | 県道路線変更 | 県 | 現状調査 | 町 | H8 10/15～11/22 |
| 8 | 新田原古墳群周辺遺跡 | 周知 | 弥生～中世 | 県道路線変更 | 県 | 分布調査 | 町 | H8 2/4 |
| 9 | 新田原古墳群 | 周知 | 古墳 | 県史編纂 | 県 | 分布調査 | 町 | H9 2月 |
| 10 | 新田原52号墳 | 周知 | 古墳 | 史跡整備 | 町 | 現状調査 | 町 | H9 2/17～3/5 |
| 11 | 新田原65号墳 | 周知 | 古墳 | 史跡整備 | 町 | 現状調査 | 町 | H9 3/6～/16 |
| 12 | 新田原67号墳 | 周知 | 古墳 | 史跡整備 | 町 | 現状調査 | 町 | H9 3/16～/31 |

*調査内容でいう調査は次のとおりに区分する。

①予備調査……分布調査=遺跡の範囲を確認するもの。現状調査=現状の地形など測量するもの。

試掘調査=遺跡の有無を確認するため部分的に発掘するもの。

確認調査=遺跡の内容を確認するため部分的に発掘するもの。

②本調査……遺跡の内容を記録として残すため、全面調査する本格的なもの

【注】

- (1) 長岡信治「後期更新世における宮崎平野の地形発達」『第4紀研究』25-3 (日本第四紀学会)、1986、59~78頁。
早田 努「三 宮崎平野の地形発達史」『宮崎県史』通史編原始古代(宮崎県史編さん室)、1997、16~32頁。
- (2) 吉本正典「溜水第2遺跡」『新富町文化財調査報告書』第18集(新富町教育委員会)、1995、132~139頁。
- (3) 茂山謙・大野虎男「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第3号(宮崎考古学会)、1977。
- (4) 日高孝治「瀬戸口遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集(新富町教育委員会)、1986、121~200頁。
- (5) 有田辰美「新富町の埋蔵文化財」『新富町文化財調査報告書』第1集(新富町教育委員会)、1982。
- (6) 石川悦雄「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集(新富町教育委員会)、1986、1~116頁。
- (7) 有田辰美「風早第I、第II遺跡」『新富町文化財調査報告書』第14集(新富町教育委員会)、1992、11~14頁。
- (8) 有田辰美「下星敷古墳」『宮崎県史』資料編考古2(宮崎県史編さん室)、1993、264~266頁。
- (9) 有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第5集(新富町教育委員会)、1986。
- (00) 有馬義人「5 新田原古墳群」『宮崎県史叢書 前方後円墳集成』(宮崎県史編さん室)、1997。
- 01 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号、1995、21~56頁。
- 02 近藤 协「銀代ヶ追遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集(新富町教育委員会)、1992、63~102・110~119頁。
- 03 注11文献。
- 04 注10文献。
- 05 谷口武憲「上園遺跡E地区」『新富町文化財調査報告書』第18集(新富町教育委員会)、1995、1~5頁。
- 06 有田辰美・有馬義人「北田地区遺跡」『新富町文化財調査報告書』第17集(新富町教育委員会)、1995、1~16頁。
- 07 黒木正文「第1章 行政 第1節 六村時代」『新富町史』通史編(新富町)、1992、261~302頁。

第2章 富田1号墳

第1節 位置と周辺遺跡

町の東部は鬼付女川、日置川が流れる段丘谷が南東部にひらけている。これら段丘谷は台地面を抉るように小谷を派生し、複雑な丘陵状の地形を形成している。日向地方の初期水田農耕は河川流域の低位段丘面で行なわれたが、大河川を制御して灌漑する技術を持たなかつたため、これらの小谷からの湧水を基にした湿田から始まつただろう。

古墳時代もこれらの追田經營を基盤としたもので、谷の周囲とそこを見下ろす台地の端部に遺跡が多く点在している。

県指定史跡富田古墳群は大字上富田、三納代、日置に点在する古墳群の総称で、その分布のまとまりから3つのグループ（A～Cグループ）に大別できる。

Aグループは富田地区的台地面から観音山までの丘陵上に分布する古墳群で、分布範囲は南北1.2km、東西2.5kmに及ぶ。このグループは古墳時代初頭の下屋敷古墳や古墳時代後期の1号墳があるが、Bグループに比べると数が少ない。調査された古墳には下屋敷古墳、富田1号墳があり、現在の新富町役場がある丘陵の斜面には横穴墓があったとされるが詳細は不明。西には近接して塚原古墳群がある。

Bグループは上薙遺跡を中心に周囲に密集した古墳群である。上薙遺跡は台地上にあり、古墳時代中期から中世までの住居跡300軒以上が検出され、特に古墳時代後期から古代にかけての住居が多い。この集落を中心として周囲の丘陵尾根部や台地面に古墳が多く点在し、分布範囲は東西1.5km、南北2kmに及ぶ。このうち調査された古墳には北原牧遺跡、藏薙遺跡、鎧遺跡、隅ヶ迫横穴墓群、比良横穴墓群があり、5世紀中頃から7世紀にかけての墳墓群である。

Cグループは日置地区的台地とその北の高鍋町永谷にある古墳群である。現在の行政区では高鍋町にあり、別個に高鍋古墳群に指定されているが、日置地区的台地面にあることから同じ古墳群としたい。永谷地区には横穴墓があり主として6世紀から7世紀にかけての後期古墳が多いと思われる。

これらのグループはそれぞれ別の古墳群と考えられるが、古墳の分布状況や時期など詳細不明な点が多いため、ここではA～Cグループの呼称を使用する。

富田1号墳はAグループに属し、径約25mの円墳である。

第2節 調査の経緯

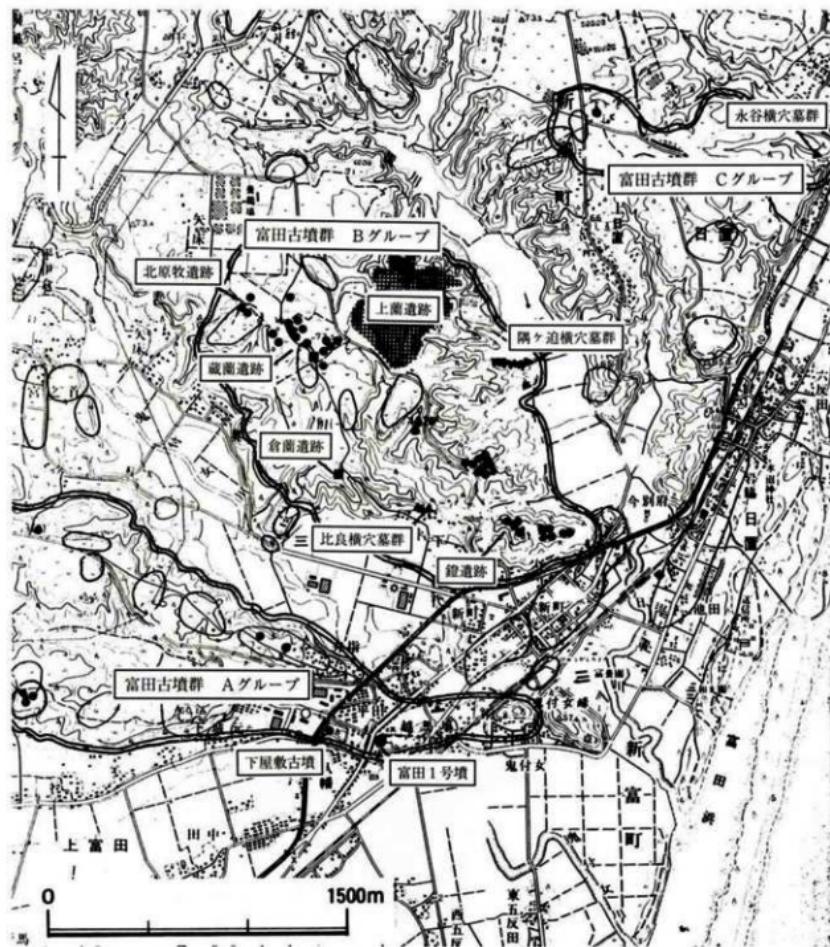
「富田村古墳」（富田古墳群の指定名称）は昭和10年に県指定史跡に指定されている。指定当時は古墳の所在する大字日置・三納代・上富田は富田村であり、この村内にあった古墳を一括して指定したものであった。

1号墳は富田八幡神社の境内地にあり、指定措置は八幡神社所有の土地一筆全体に行なわれている。墳丘は社殿より一段高い平坦面にあり、もともとは西から東へと続く丘陵上にあったが、区画整理によって地形の旧状が失われ、現在では島状の独立丘陵に見える。

平成7年5月に町都市計画課から教育委員会に土地区画整理事業時の同墳の取り扱いについて協議があった。内容は①神社境内地のうち古墳がある場所を町で買収し、区画整理後の緑地公園

にしたい、②墳丘の近くまで削平された箇所は地山が露頭し、危険な状態であるため擁壁が必要である、の2点であった。

町教育委員会では県文化課と協議し、現状変更を加えて同年9月から墳丘の規模と周溝の位置を確認するため発掘調査を実施した。



第2図 富田古墳群分布図

調査の結果、同墳は径約25mの円墳で、幅2m・深さ0.5mの周堀が巡り、出土した須恵器から6世紀代の築造が推定されている。

平成8年度になって②について検討され、墳丘崩壊回避と危険防止の観点から、擁壁を遺存する周溝外に設置することになった。

本年度の調査は擁壁設置予定箇所における周溝の遺存状況を確認するための試掘調査であり、擁壁を設置する西側崖面に向けて3箇所のトレントを設定した。トレント番号は1次調査からの通し番号とした。

第3節 調査の結果

第7トレントでは周溝が検出され、第8トレントでは周溝外側が既に削平されていた。第9トレントでは周溝が不明確であった。

また、それぞれのトレントの表土下30cmには崖面の削平時に下から上げられた土が堆積しており、第7トレントの西側斜面からは現代の瓦片や瓶類が多量に出土した。

出土遺物は第7トレントで石錘1点、須恵器片3点が検出され、第8トレントでは須恵器の提瓶の口縁部が検出された。

今回の調査で擁壁設置部での周溝位置が判明したため、来年度は設置部のその他の遺構・遺物について本調査する予定である。



第3図 富田1号墳 トレント配置図

第3章 富田城切通地区遺跡

第1節 位置と周辺遺跡

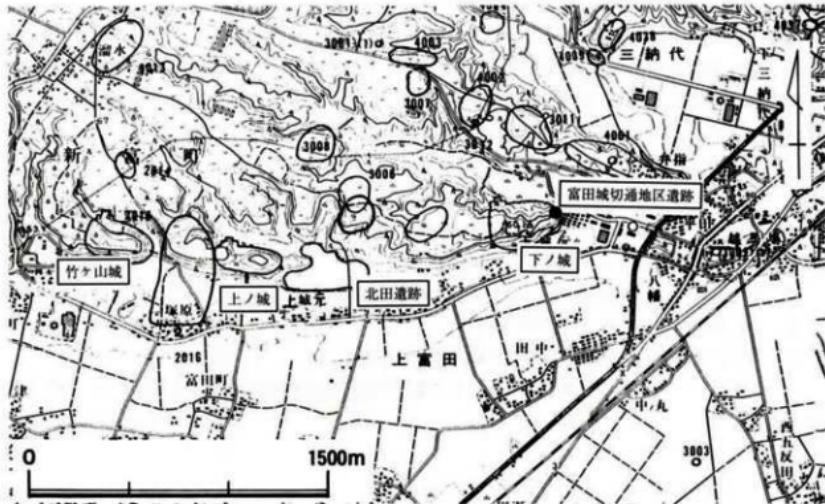
現在の行政区域である大字「上富田」は鬼付女川右岸台地上から国道10号線の西側がその範囲である。弥生時代以降の遺跡が台地直下の河岸段丘面に多く、文献上でも日向国圓田帳(1197年)に「下富田80丁」とあるように新富町のなかでも早くから開発が進行した地域である。

地区内には「上ノ城」「下ノ城」の2つの山城があり、その周囲には「城元」「屋敷」などの地名が散見でき、新田地区的竹ヶ山城も近接する。

忽領伊東氏の支配が日向地方全域に及んだ南北朝時代以降は「伊東48城」の一つがおかれて、のちの伊東義祐が出家して庵をつくったのも富田であった。佐土原・都於郡の本城を見据え、海岸線にも近いことから、外城のなかでも重要な場所であつただろう。

しかしながら、各時期に登場する居城や集落がどこにあたるかや、城が築城された年代など不明なことが多く、現在の城の呼称も明治期以降のものである。

下ノ城は丘陵を掘り分断した2つの曲輪からなっている。城の北側は明治期に造成された溜池が西から東へと続き、西側は台地面、南側は急斜面である。東側は現状では急斜面直下の平坦地に住宅地が広がるが、昭和30年代以前はさらに東側へと続く丘陵があった。



第4図 富田城下ノ城位置図

第2節 調査の概要

新富町では総合文化公園計画を進行中で役場西側の丘陵部と溜池を造成し、平成10年度に文化会館建設の着工を予定している。

平成6年度には総合文化公園案として、文化会館、図書館、歴史資料館の建設が提案され、下ノ城跡の曲輪内に歴史資料館の建設を予定していた。

町教育委員会では文化財保護審議委員会を中心協議し、①予定地は下ノ城の曲輪内であり、歴史像を歪める建造物は望ましくないこと、②山城周辺は自然を活かした公園が望ましいこと、③造成地は下ノ城の近接地であることから埋蔵文化財の取り扱いに十分配慮することなどの答申を行なった。

その結果、計画はほぼ答申どおり了解され、当面は文化会館の建設が最優先であることから、造成地の埋蔵文化財の調査を行なうこととなった。工事予定地内は山城の近接地はさることながら、富田古墳群Aグループの分布範囲もあり、横穴墓や円墳および窯跡などの存在が想定されたため、試掘で埋蔵文化財の有無と範囲を確認した。

第3節 調査の結果

丘陵上の遺構確認から実施し、6本のトレンチを設定した。北東側の緩斜面上でも計4本のトレンチを設定し、急傾斜地ではバックフォーによる掘削トレンチで遺構を確認した。しかしながら北東側緩斜面で古墳時代の甕小片が数点あった以外は想定された遺構・遺物ともに検出できなかった。また東側の南斜面から北斜面へ貫通する第2次大戦中の防空壕が確認できたが、内部は陥没して危険な状況であった。

第4節 富田城下ノ城の測量図について

今回の調査区では主たる遺構や遺物は確認できなかつたが、総合文化会館建設予定地の現況測量図によって下ノ城の縄張の概要が判明したので報告したい。

図5から観察できることは以下のとおりである。

- ① 西から続く丘陵を3本の堀で分断し、2つの曲輪を構築している。
- ② 城の大手は南側にあり、第1曲輪の虎口は南東側に、第2曲輪の虎口は東側にある。
- ③ 2つの曲輪の土壘は南側を除いてすべてに巡る。
- ④ 第1曲輪の土壘は西側で高く、土壘上面の幅も広い。
- ⑤ 第2曲輪の南側は小さな堀がある。
- ⑥ 大手付近は広場になっており、曲輪の可能性がある。

以上が気付いた点であるが調査担当として力量不足なので、類例を比較して別の機会に再度報告したい。

第5圖 富田城下城測量図



第4章 上日置城跡遺跡

第1節 位置と周辺遺跡

大字「日置」は町の台地中央部から海岸へ流れる日置川流域にあり、その範囲は海岸砂丘列と台地面に及ぶ。また台地面は日置川を挟んで南部の北原牧地区と北部の上日置地区に分かれる。

海岸砂丘列上には弥生時代前期の今別府遺跡などがあり、宮崎県でもいち早く弥生農耕が始まった地域である可能性が高い。

北原牧地区的台地面には古墳時代から中世にいたる大集落である上菌遺跡があり、その周辺には富田古墳群Bグループがある。

上日置地区的台地面には昭和55年に藤掛遺跡が調査され、縄文時代の集石造構と古墳時代後期の堅穴住居が検出されている。この遺跡を含み、台地のほぼすべてでは縄文時代から中世の遺物が表採されているため、多くの遺構が密集しているようだ。近接する高鍋町永谷地区や上日置地区北部には横穴墓や小円墳があるため、これらを富田古墳群Cグループと仮称している。

日置川は北西から流れる本流と北から流れる支流があり、本流と支流の間に上日置の集落が営まれている。上日置城跡はこの集落から日置川支流を見下ろす台地端部にあるが、海岸部を見渡すことはできない内陸部にあたる。

現在のところ文献にこの城にあたる名は確認されない。しかし海岸線よりも現在の県道南高鍋線が高鍋藩に続く古い街道であったことから、この集落と山城の立地が興味深い。

第2節 調査の経緯

平成8年6月、高鍋土木事務所と県文化課から県道南高鍋線の路線改良にともなう周辺遺跡についての照会があった。南高鍋線は上日置地区から高鍋市街地に通じる県道で、国道10線とはほぼ平行に伸びており、近年になって交通量が増加している。

路線予定地内を分布調査したところ、特に上日置地区的集落を中心に縄文から中世までの遺物が表採され、ほぼ全面調査で対応することになっている。

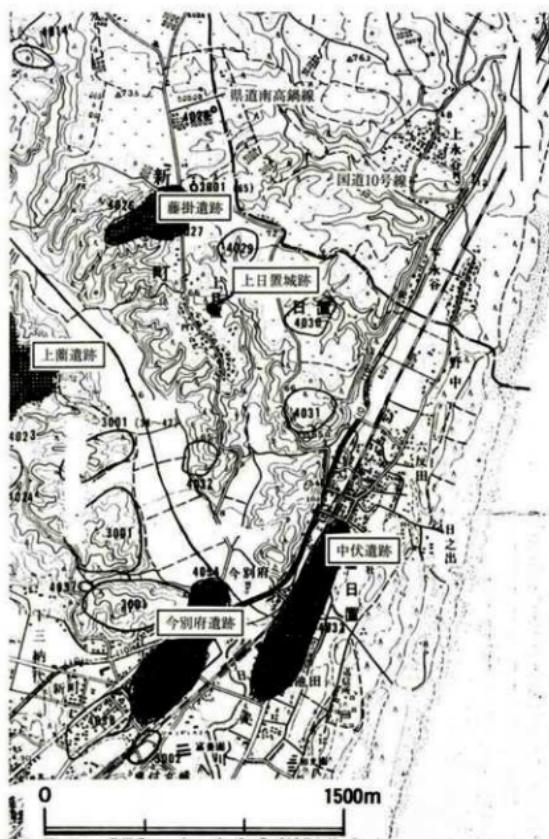
しかし予定道路が上日置城の堀と曲輪を貫通するようになっていたため、町教育委員会では町内でも8箇所しかない中世山城であるこの城跡をなるべく現状のまま保存できるよう協議を行なった。

県文化課と協議した結果、路線変更の協議資料として山城の詳細な測量図を作成し、この城の重要性を土木事務所と地区住民に説明することとなった。

第3節 上日置城の測量結果

上日置城は台地から東へ伸びる舌状地を堀で分断した2つの曲輪からなり、3面は小谷で囲まれている。

第1曲輪は虎口が南を向き、南側と東側に土壘が施されている。曲輪内は570m²ほどの平坦地で中央部から西よりに溝が方形状に掘られているが近年になってからのものである。土壘は南東側が高く、北側は土壘がないため見晴らしがよい。北側と南側の袖曲輪は曲輪頂上からの高低差がそれぞれ約8m・約7.5mあり、斜面は急崖である。



第6図 上日置城位置図

- ④ 第1曲輪の虎口は南側にある。
- ⑤ 第1曲輪の北と南には袖曲輪がある。
- ⑥ 第2曲輪には土塁がなく、全体として粗雑なつくりである。
- ⑦ 第2曲輪の虎口は西側にある。
- ⑧ 堀2の底には土塁列が2本ある。

現在のところは調査担当者としての力量不足から他類例と比較することができないため、今回のデータをまとめるのみで止めたい。

また本城の縄張図は平成6年度に崎田欣二氏によって作成されたものを県文化課の資料提供を得て参照したものである。

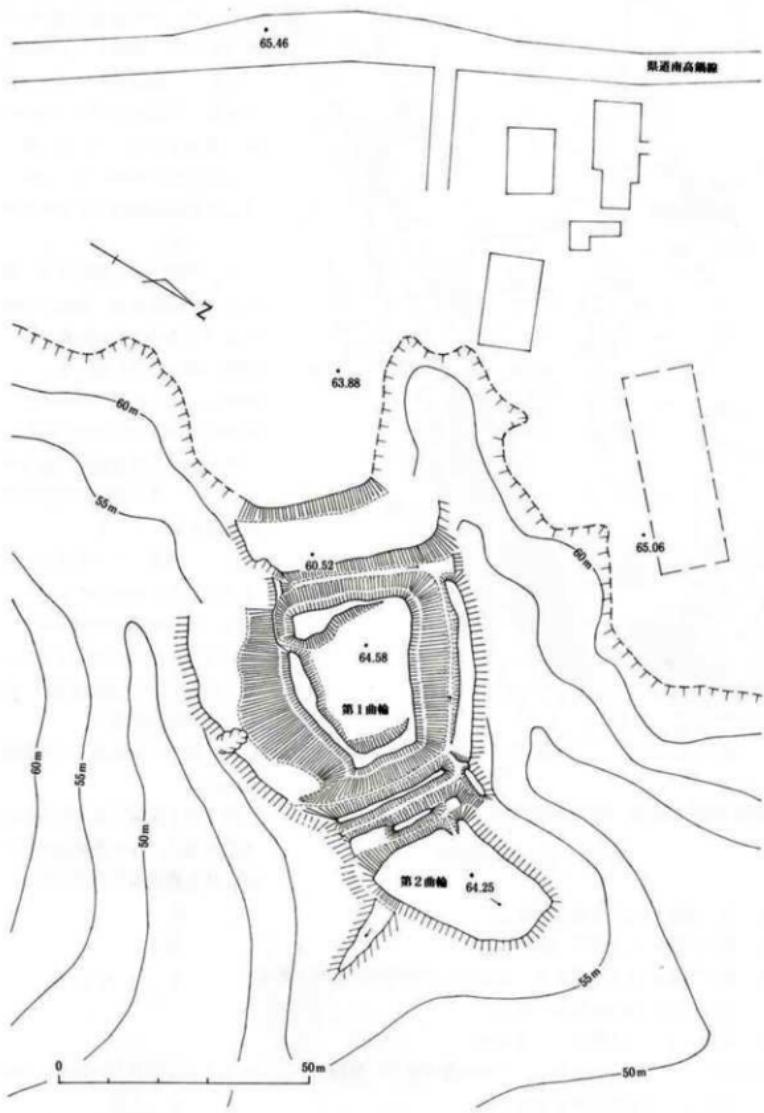
第2曲輪では虎口が西側にある。内部の平坦面は約480m²であるが周囲に明確な土塁は確認できない。曲輪内の平坦面は西から東への高低差が約1mあり、緩い傾斜面になっている。南と北は谷底へと急崖になっており東は痩せ尾根状の舌状地で谷地へとつなづく。

第1曲輪と第2曲輪は深い堀によって造成され、前者と後者の高低差が約0.6mあり、第1曲輪が高い。また堀(堀2)の底部には2つの土塁列があり、西側のものは南北の谷まで続く。

結果として各曲輪は3面を谷に囲まれ、それ自体が自然の堀の役割を担っている。

以上の計測データをまとめると次のようになる。

- ① 舌状台地の先端にあり、堀によって台地と分断されている。西側を除く3面は小谷で自然の堀の役割を担う。
- ② 第1、第2の2つの曲輪がある。
- ③ 第1曲輪には南から東に土塁が巡り、特に南東部が高いが、北と西には土塁がない。



第7図 上日置城縄張図

第5章 祇園原古墳群 (新田原古墳群)

第1節 一ヶ瀬川下流域の古墳群の様相

宮崎県の一ヶ瀬川下流域は九州でも有数の古墳密集地として知られ、前方後円墳だけでも宮崎県の総数のうち約4割がある。

代表的なものとして、右岸流域に西都原古墳群、三納古墳群、三財古墳群、清水西原古墳群、那珂横穴墓群があり、左岸流域に茶臼原古墳群、穂北横穴墓群、祇園原古墳群、塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、富田古墳群がある。以下では一ヶ瀬川下流域の古墳群の築造時期などを概観する。

弥生時代終末期の土壙墓や周溝墓は新田原台地の川床遺跡などで確認されているが、それらが流域の古墳群とどのように関係しているか判然としない。

古墳時代初頭の例としては一ヶ瀬川河口部の丘陵にある下屋敷古墳があげられる。同墳は前方後円形の墳形を呈し、日向地方で最古の古墳とされている。

前期になると多くの地域で小規模な前方後円墳が築造される。三財・三納・茶臼原・山之坊古墳群がその例で、いずれも墳長50mの小規模なものが築造され、流域内に多くの小首長が勃興した様子が伺える。特に西都原台地では複数の系列が台地上を共有して前方後円墳を築造しており、規模からも流域の他首長を若干上回る勢力をもっていたことがわかる。

しかし中期の西都原台地上での女狭穗塚・男狭穗塚古墳の登場が流域の古墳築造に大きな影響を与える。西都原台地上ではそれまでの複数の系列はすべて前方後円墳の築造を中断し、三財・山之坊古墳群などでは前方後円墳の築造が断絶する。いっぽう、これと対象的に祇園原古墳群では大久保塚古墳、茶臼原古墳群では児屋根塚古墳、三納古墳群ではやや時期が下って松本塚古墳などと、墳長80m以上の中大規模墳が突如として築造されるなど各地域では複雑な状況を示す。

後期になると祇園原・西都原で前方後円墳が築造されるが、6世紀を通じて継続しているのは祇園原古墳群だけである。

一ヶ瀬川流域での前方後円墳の築造停止は6世紀第4四半期から7世紀第1四半期のことと、石船・祇園原・西都原古墳群で最後の首長墓系譜が認められる。また6世紀中頃から小円墳群や横穴墓群が築造される地域があり、穂北横穴墓群や上田島横穴墓群、富田古墳群などがある。

ところで、祇園原・山之坊・石船・塚原の各古墳群は昭和19年に国指定史跡「新田原古墳群」として一括指定され、前方後円墳25基、方墳2基、円墳179基の総数207基があるが、分布の集中が4つに大別できるため、それぞれの中心となる字名を用いて別個の古墳群として把握している。

なお古墳番号は混乱を避けるために塚原から祇園原まで続く「通し番号」を使用しているため注意して頂きたい。

第2節 祇園原古墳群の古墳分布と築造時期

今回調査対象の祇園原古墳群は新富町大字新田字祇園原～春日そして西都市字右松に分布する古墳群でその範囲は南北1.3km、東西1.5kmに及ぶ。

分布する地形は新田原台地の標高70～90mの面で、70～80mの低位台地と80～90mの高位台地に大別でき、前方後円墳14基、円墳174基、方墳1基、墳形不明1基の総数154基が現存するが、

近年の調査で36基の円墳の周溝が検出されているため、これらを含め今後の調査によって数が増えるものと考えられる。

これらの古墳が分布する低位台地面には南へとつづく東西2本の谷があり、この谷に挟まれた微高地上に古墳が集中している。特に西谷は台地面に深く入り込み、このことで古墳群をさらにいくつかのグループに分けられ、仮にまとめるところのようになる。

Aグループ：東側の低位台地から高位台地に至る部分で前方後円墳が最も集中しており分布域も広い。弥吾郎塚古墳から68号墳にかけての西側には南へと続く川床があり、これを挟んだ対面にも古墳が散見される。

Bグループ：霧島塚古墳以外はすべて小円墳で密集度が激しい。主体部に地下式横穴が採用されている例がいくつかある。

Cグループ：Bグループとは西の谷を挟んでやや離れている。前方後円墳1基、方墳1基のほか中規模な円墳もあるが、他は小円墳である。

Dグループ：中規模な円墳が3基あり、B、Cグループと西谷を挟んだ位置にある。

上記のグループのうちAグループの北西に前期の前方後円墳が2基認められる。これらはいずれも前方部が低平で後円部径に対して前方部幅が狭い特徴をもつ。以降前述の大久保塚古墳が中期に築造され、6世紀になってから継続的に9基の前方後円墳が群集する。これら9基の前方後円墳は埴輪や墳形からその築造時期が推定され、墳長50m以下の小規模墳と墳長60～100mの中大規模が並列して築造され、階層構成型の群を形成していると予想される。

これに対してBグループは築造時期不明の霧島塚古墳以外は6世紀後半以降の群集墳であり、C・Dグループも6世紀以降の築造が予想されるが方墳や径25m以上の円墳が多いことから終末期の首長墓の可能性がある。

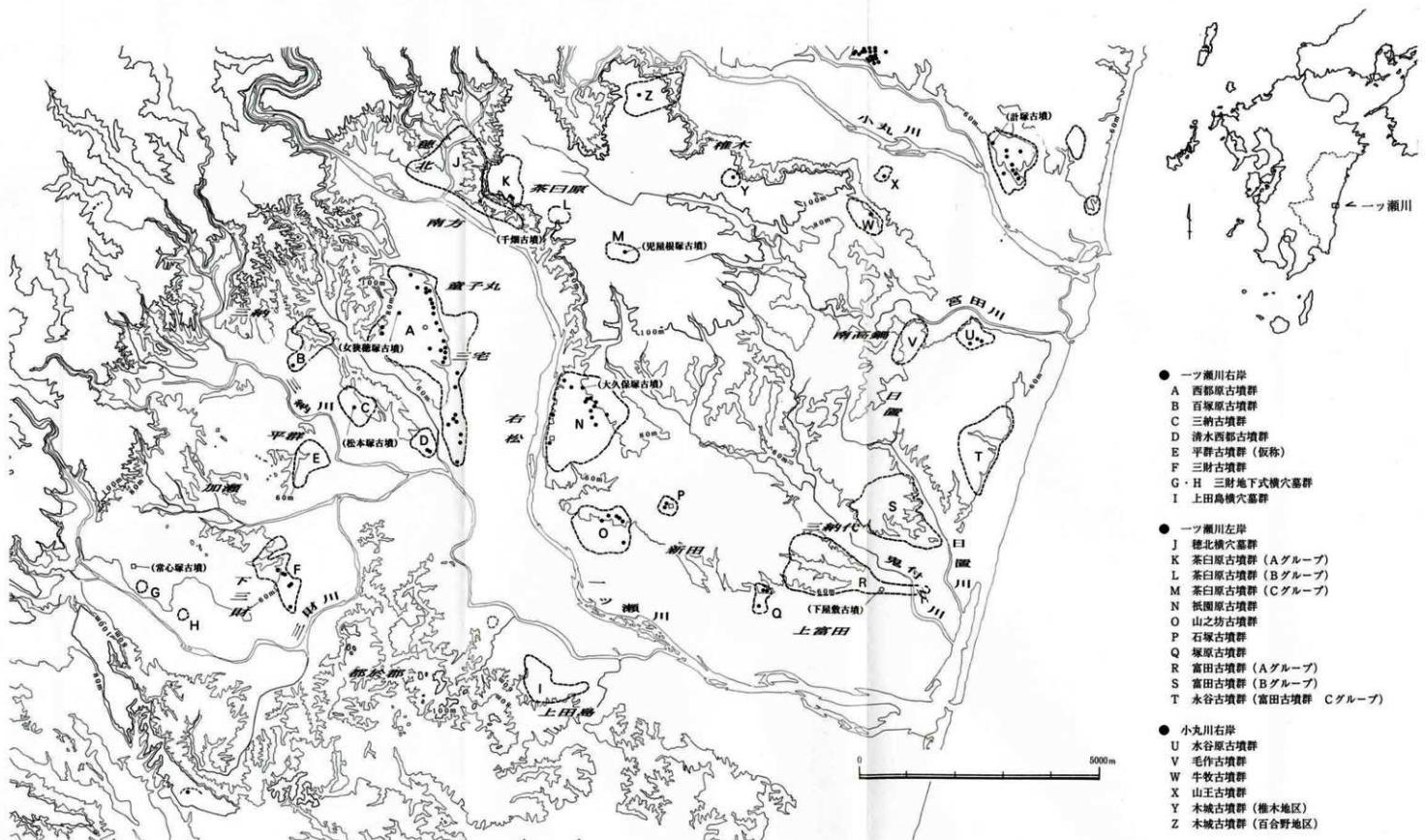
第3節 調査の経緯

宮崎県における台地面の開拓は明治後期と戦後すぐにピークがある。それまで荒涼とした台地は人々の労苦によって畠地帯となっていました。祇園原・春日地区はかつて佐土原藩直轄の軍用馬の牧場であったため、本格的な開拓が始まるのは明治になってからである。その後開拓とともにない人家戸数が増え、耕作によって煙滅した古墳が多い。最近の調査で徐々にその分布状態が判明してきつつある。

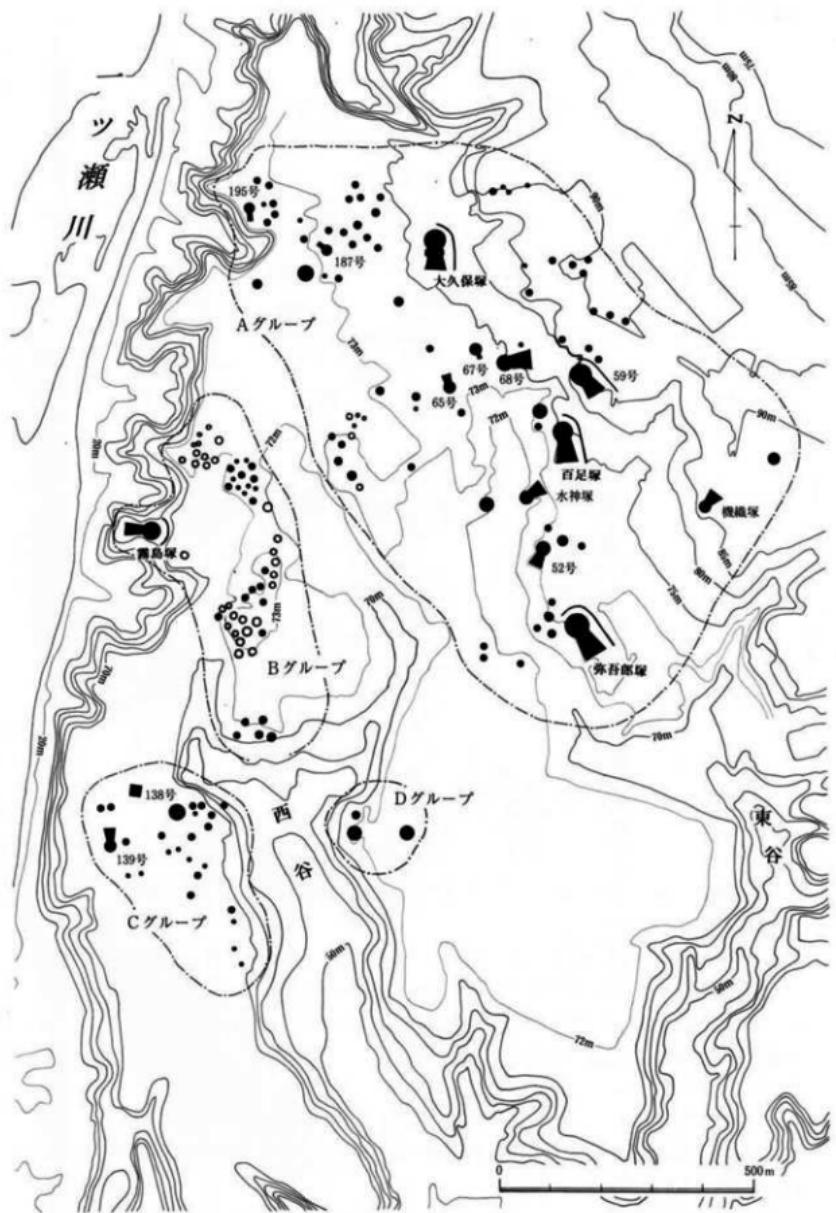
近年は農業の集団化による大規模なほ場整備が町内各地で実施され、多くの遺跡の内容も判明している。平成4年度に祇園原地区でもほ場整備が計画されたため、町教育委員会では古墳保存の協議を重ねた。その結果、地区住民の方々の理解や関係各機関の協力が得られ、祇園原地区では古墳の保護を重視し指定地の拡大と公園整備をあわせて実施することになった。

平成7年度には古墳の周溝を含んだ土地の指定拡大を実施し、第2次史跡買上げ事業を進行中である。平成5年度からは古墳群の詳細を確認し整備のためのデータ蓄積を目的に墳丘測量調査や指定拡大のための試掘調査を実施してきた。

また平成7年度からは史跡整備基本計画の策定を目的に専門検討委員会を設置し、専門家による意見をもとに本年度中の策定を予定している。本年度はAグループの前方後円墳の測量調査が目的であり、次年度以降計画されている整備調査への基礎資料を蓄積するためである。



第8図 一ツ瀬川流域古墳群分布図



第9図 犀園原古墳群古墳分布図

第4節 測量の結果

本年度は前方後円墳3基の測量調査を実施したので、その概要とデータを報告する。

①新田原52号墳

Aグループの南にあり弥吾郎塚古墳の北に位置する。

古墳周囲は耕作によつて掘削された箇所が多く墳頂には戦時に兵隊が掘ったという土壌が数多くある。

特に後円部の土壌は大きく、最近公表された金銅製単龍柄頭はここから出土したものだといふ。

墳長は約54m。後円径が約29mで、前方幅が30mと前方部が若干発達している。

後円部の高さは前方部と大差がないが、この時期の前方後円墳としては墳頂平坦面が広すぎるため、土壌掘削時の掘り下げによると思われる。

外表には環があるが前面にいたるものではなく葺石は存在しない。埴輪も表採されない。

周溝は等高線の流れからその存在が推定されるが、形状については不明。

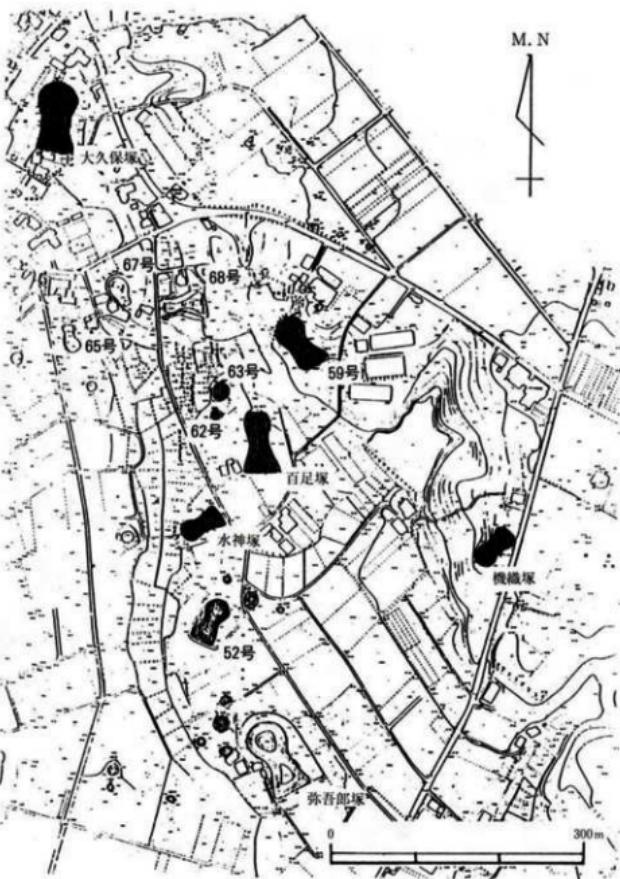
これらのことから6世紀のなかでも埴輪消滅後の前方後円墳であると推定され、Aグループの前方後円墳でも最後の段階に位置すると考えている。

②新田原65号墳

Aグループの中程にあり谷の西側に位置する前方後円墳である。古墳周囲は畠であるが近接して宅地があるため他の古墳との位置関係が確認しづらい。墳丘は前方部が特に掘削が激しく、他の周囲も形状に変化が認められる。

墳長は現状が39mで、Aグループの多くの前方後円墳と異なり前方部を北に向いている。

後円径約23m、前方幅約19mであり、前方部はさほど発達していない。墳頂高は後円部が若干



第10図 祇園原古墳群Aグループ航空測量図

高いぐらいである。

外表には葺石が散見し以前の試掘調査でも墳丘を覆うことが判明している。埴輪はない。

周溝はあるが形状は不明である。

以上のことから、Aグループのなかでもその墳形と葺石を施すことから、さほど新しくない時期の建築が予想されるが、埴輪を採用しない点などに疑問が残る。資料蓄積を努めたい。

③ 新田原67号墳

65号墳の北西に近接する前方後円墳である。

墳丘の西側には家があり、その他の3面を畠で囲まれている。後円部全周と墳丘寄りの部分には排水溝が掘削されている。特に後円部側は畠自体を一段低くした造成が認められ、もともとは前方部のある高さが基盤であったはずである。

上記のことから墳丘の旧状を想定すると、墳長約37m、後円径約13m、同高4m、前方幅約14m、同高1mが復元でき、後円部が発達していることがわかる。

外表の葺石の有無は不明で、埴輪もなく、周溝も周囲の造成で明瞭ではない。築造時期は前方部の形状に若干の不安もあるが、帆立貝式前方後円墳であるならば5世紀後半から6世紀前半までの時間幅が必要である。資料の蓄積を努めたい。

第5節 まとめ

今回測量した前方後円墳は埴輪の採用されていない古墳である。祇園原古墳群ではこれまでに5基の前方後円墳と2基の円墳から埴輪が表採されており、ある程度の時期の推定が可能になりつつある。

上記の3基の古墳は埴輪が採用される以前のものと以後のものに大別できると考えている。

67号墳では5世紀中葉の大久保塚古墳と6世紀代の首長墓の継続を証明できる可能性がある。

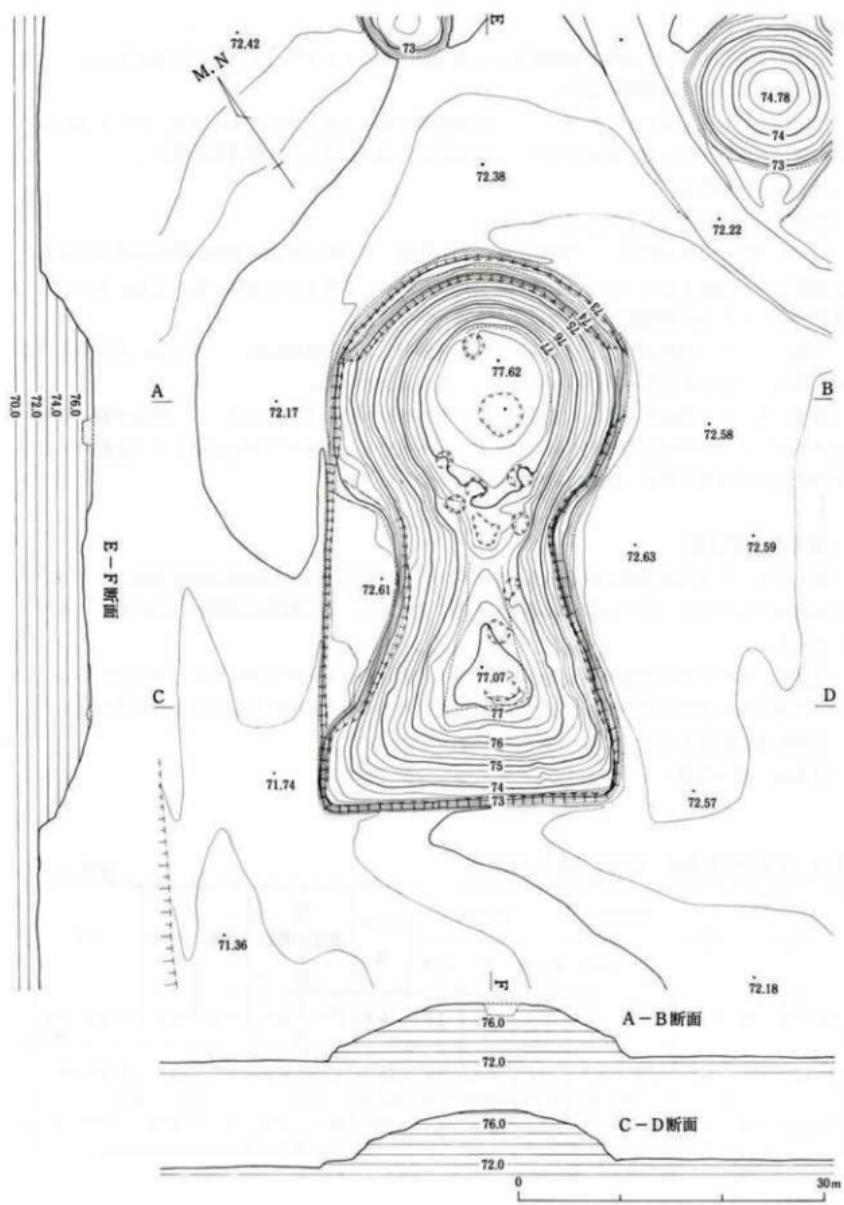
今後の資料蓄積を努力したい。

なお各古墳の測量データは表2にまとめたので参照されたい。

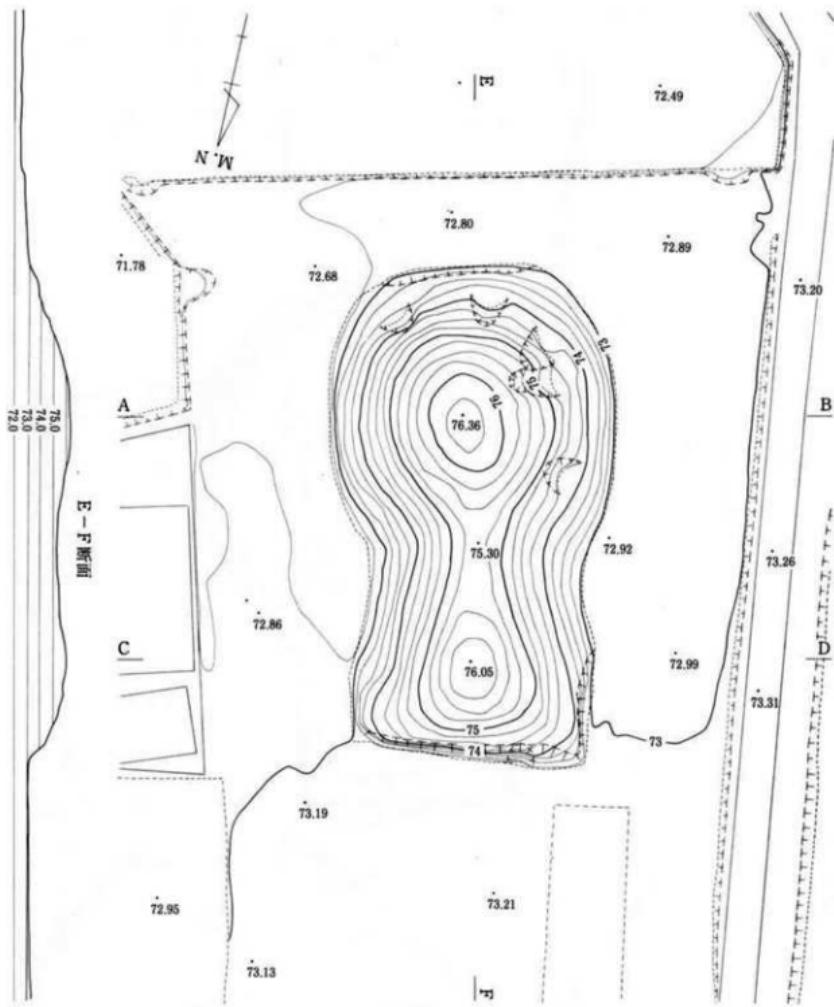
表2 平成8年度測量 前方後円墳データ一覧

(単位:m)

| 古墳名 | 墳長 | 後円部 | | 前方部 | | | クビレ 幅 | 造出 | 葺石 | 埴輪 | 周溝 | 方位 |
|---------|------|------|-----|------|------|-----|----------|----|----|----|----|-----------|
| | | 径 | 高さ | 前端幅 | 長 | 高さ | | | | | | |
| 新田原52号墳 | 54.8 | 29.6 | 4.9 | 30.0 | 27.6 | 4.6 | 18.4 | なし | なし | なし | あり | N-145° -W |
| 新田原65号墳 | 39.0 | 22.6 | 3.4 | 18.8 | 16.4 | 3.0 | 17.0 | なし | あり | なし | あり | N-12° -W |
| 新田原67号墳 | 37.4 | 13.2 | 4.2 | 14.0 | 12.0 | 1.4 | 11.0 | なし | 不明 | なし | 不明 | N-160° -E |



第11図 新田原52号填填丘測量図



A - B 断面

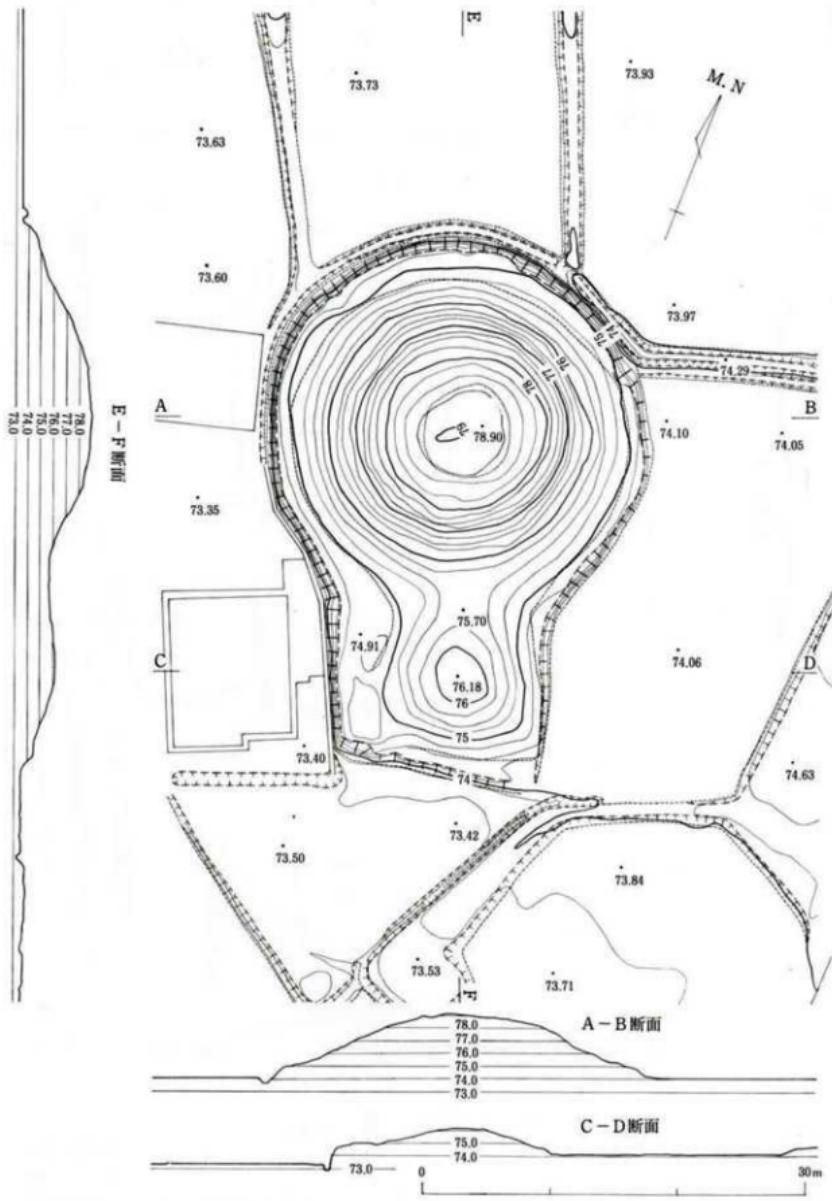
75.0
74.0
73.0
72.0

C - D 断面

75.0
74.0
73.0
72.0

0 30m

第12図 新田原65号墳墳丘測量図



第13図 新田原67号填埋丘測量図



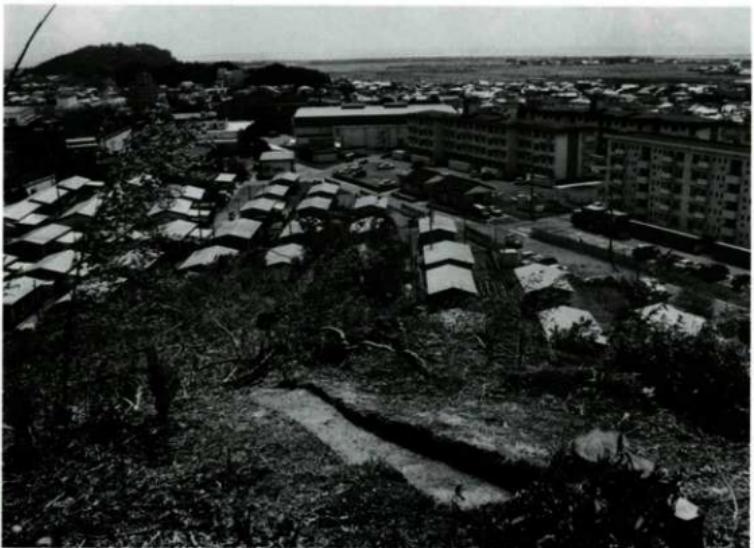
図版1 富田1号填遠景（西から）



図版2 富田1号填第7トレンチ（西から填丘を見る）



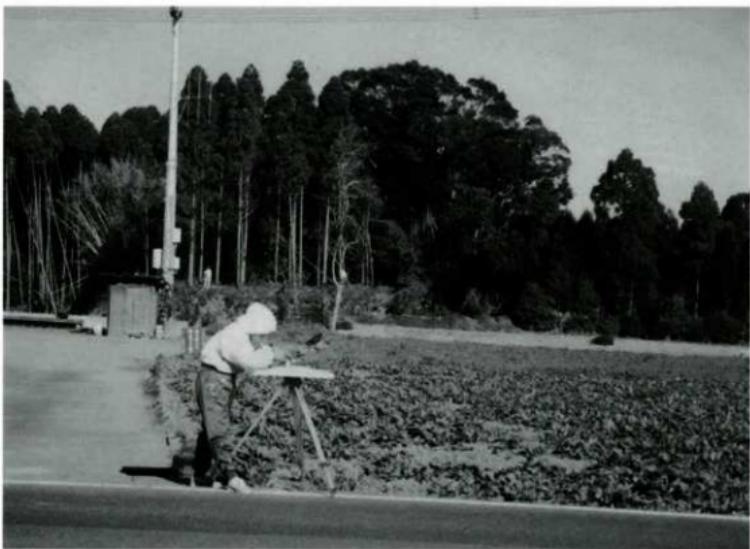
図版3 富田城切通地区遺跡調査状況



図版4 富田城切通地区遺跡調査状況



図版5 上日置城跡遠景（北から）



図版6 上日置城調査状況



図版7 祇園原古墳群Aグループ空中写真・平成元年頃（左側が北）



図版8 祇園原古墳群Aグループ空中写真・平成9年現在（南から）

報告書抄録

| | |
|--------|-------------------------------------|
| ふりがな | へいせい ねんど ちょうないいせきはつくつちょうさかいようほうこくしょ |
| 書名 | 平成8年度 町内遺跡発掘調査概要報告書 |
| 副書名 | |
| 卷次 | |
| シリーズ名 | 新富町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第21集 |
| 編著者名 | 有馬 義人 |
| 編集機関 | 新富町教育委員会 |
| 所在地 | 宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地 |
| 発行年月日 | 1997年 3月31日 |

| ふりがな 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|--------------------------|-------------------|---------|---------------|-----------------------|-------------------------|--------------|
| | | 市 町村 | 遺跡 番号 | | | |
| 富田1号墳 | 新富町大字上富田字 越馬場 | 47 | 1031 | 960515 ↓ 960628 | 約 200m ² | 区画整理 事業 |
| 富田城切通地区遺跡 | 新富町大字上富田字 切通ほか | 47 | 3004 | 960711 ↓ 960925 | 約 3000m ² | 総合文化 会館建設 |
| 上日置城跡遺跡 | 新富町大字日置 | 47 | - | 961015 ↓ 961122 | - m ² | 県道路線 変更 |
| 祇園原古墳群 (新田原52-65-67号) | 新富町大字新田字 東俣ほか | 47 | 1001 | 970217 ↓ 970331 | - m ² | 遺跡範囲 確認 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 |
| 富田1号墳 | 古墳 | 古墳時代 | 古墳の周溝 | | 土師器・須恵器・ 石錘 | |
| 富田城切通地区遺跡 | 古墳 | 古墳時代 | 散布地 | | 土師器 | |
| 上日置城跡遺跡 | 山城 | 中世 | 曲輪・虎口・ 堀など | | 未表採 | 縄張りの測量 |
| 祇園原古墳群 (新田原52-65-67号) | 古墳 | 古墳時代 | 前方後円墳 | | 須恵器(表採) | 墳丘測量 |

新富町文化財調査報告書 第21集

平成 8 年度 町内遺跡発掘調査概要報告書

発行年月日 1 9 9 7 年 3 月
発 行 宮崎県新富町教育委員会
印 刷 (有)印刷センタークロダ